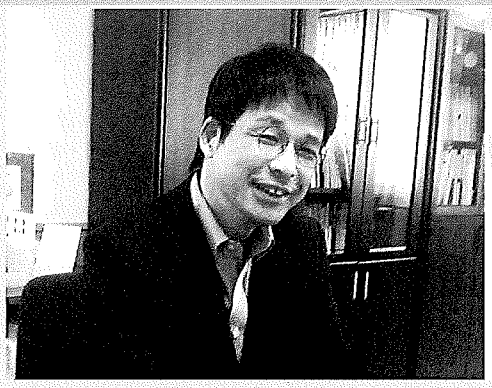
（今月のことば）

教育長インタビュー　島根県教育委員会教育長　野津建二さんに聞く

島根創生　人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根をつくる（前編）

［聞き手］本誌編集長　近藤真司

島根創生
人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根をつくる



〈プロフィール〉

野津　建二（のつ　けんじ）

島根県教育委員会教育長

1984年4月　島根県庁入庁
2011年4月　島根県教育庁社会教育課長
2012年4月　島根県教育庁保健体育課長
2014年4月　島根県政策企画局政策企画監
2015年4月　島根県総務部財政課長
2015年12月 島根県総務部次長
2018年4月　島根県政策企画局長
2021年7月から現職

「笑顔あふれる　しまね暮らし」宣言

島根には、自然と歴史の中で育んできた、人々の豊かな暮らしがあります。

近所では、子どもたちが元気に走り回り、
若者は恋愛をし、趣味を楽しみ、地域活動にも参加する。
家族を思い、やりがいのある仕事に就き、高齢になっても、元気で生きがいを感じている。
皆で囲む食卓は笑い声に包まれ、穏やかで心地よい時間が流れる。

そんなごく普通の暮らしです。

地域の助け合いや絆が残る古き良き人間関係が、郷土愛と誇りを育み、
人々の多様な関わりを通して生まれる新しい試みが、未来への希望を高め、
暮らしをより豊かなものにしていきます。

この人間らしい、温もりのある暮らしを、ここで育み続けたい。
未来の子どもたちへ、大切に贈り届けたい。
日本中の多くの人へ、島根にしかない暮らしを知ってもらいたい。

「島根創生」の始まりにあたり、
「笑顔あふれる　しまね暮らし」を守り、育て、未来へつなげていくことを、
ここに宣言します。

イメージ動画はこちら

はじめに

編集部：早速、教育長にお話を伺っていきたいと思います。

キーワードとして、まず「公民館」。次に「社会教育主事、社会教育士。派遣社会教育主事」。それから人材育成。研修とか県として広域的なところからどういう立ち位置で市町村との関係性をつくってきたのか。これからどういう発展をお考えになっているか。最後に、最終的に「地域の持続」をどうしていくか、まとめとしてお話しいただければと思います。

島根の社会教育について

編集部：10年ぐらい前、島根の公民館が脚光を浴びていて、いろいろな資料を拝見しました。これはなかなかすごいなと思っていました。『月刊公民館』2011年（平成23年）11月号の野津さん参加の座談会のテーマが県内の公民館を活性化させて「実証『地域力』醸成プログラム」でした。これを仕掛けて10年ちょっとたって、どんな感じなのか。ビフォーアフターの観点から、まずコメントを頂きたいと思います。

野津：なぜ島根が社会教育を県と市町村が一緒にやっているかというと、ま

☆2022年8月29日（月）、島根県教育庁会議室にて収録しました。

ず島根というこの地域が、経済的に豊かではないわけです。でも住民が暗いわけではなく、元気なお年寄りがたくさんいらっしゃる。笑って過ごしている。そういう生活がすごく自然にあると思っています。

理由の1つは、コミュニケーションが取れる環境がある。なぜそれが重要かというと人間が動物からヒトとなり火を使う、道具を使う、言葉を使う。人間は言葉でものを考えますよね。言葉を使う、考えるだけじゃなくてしゃべる。人の声を聞く、言葉を聞く。言葉というのは意味があるので、中身がありますよね。それをしゃべったり聞いたりするということが人間の本能としてあります。それが抑制されるとストレスになるわけです。

同じ人とばかり話していると話す内容がなくなってくるから、人は何をするかというと移動して話すんですよね。移動して違う人とコミュニケーションする。で、コミュニケーションというのは、自分が言うだけでも聞くだけでもなくて、言ったことに反応してもらって返してもらうということ。特別な話ではない、ごく普通のことを普通にやりたい。そうすると、人は移動してより多くの人と話すために交通手段を考える。車、汽車、飛行機、船。物流もありますけれども、移動して知らない人と話すために、人はそういうことまで考える。そして使うようになるわけです。

こういう本能が抑制されるとストレス社会になる。日本でそういうことが顕著になってきたのが1955年以降です。1955年（昭和30年）はとても大きな転換期だそうですね。55年から人が都市に集まりだした。それまでずっと、東京、大阪、名古屋、三大圏の人口の増え方とそれ以外の地方の増え方は、江戸時代からずっと同じだったのです。

ところが55年からは地方から大都市に向かって人が急激に移動しはじめた。戦後の社会を復旧するために移動しはじめて、重工業をやるには水があって土地が必要になる。ということは東京湾とか大阪湾、遠浅のところを埋め立ててそこに工場を建てた。そうするとそこに働く人がいる。人が移動する。人を支えるためにまた人がいる。学校とか病院とかができる、ということになるわけです。

55年からそういうことが始まって、都市部と地方の格差が始まった。経済的な格差もそうだし、人口の格差もそうだし、インフラの整備もみんな地方は後回しになった。だけど、人が集まるだけではコミュニティーをつくれなかったのです。人工的な集団では、コミュニケーションがある社会をつくれなかったのです。

隣に人がいれば当然話せると思うのだけれども、実際に日本の社会はそうはできなかった。雑踏の中の孤独みたいな。核家族化も進み、コミュニケーションが、家庭と職場だけの方も多いのではないでしょうか。それはストレスなんだけれども、都市部では経済的なもので満たされます。お金でレクリエーションができる。お金があればレストランへ行く。遊びに行ってもそういうことができる。

そういう社会でありながら、ここら辺は取り残されているのです。いわゆる過疎です。過疎という言葉は島根発祥、島根県で生まれました。

編集部：研究者の方は最初に起きたのは島根県だと。

野津：そういった中でも、島根では人と話すという社会は失われていない。むしろ経済的な裕福さがない分だけ、

23-01_05- インタ野津12.8 22.12.8 15:25　ページ 7

人と話すという贅沢な人間らしい本能を満たす行為というのはそんなに廃れていないのです。都会と比べると廃れていない。そこが特徴です。

隣の家まで何キロあってもそこに行ってお茶を飲む。田舎だと3時ごろに漬物でお茶を飲む習慣があります。それで話すという行為があって、それが島根には一定程度残っているのです。

僕の名刺の裏に「笑顔あふれる　しまね暮らし」宣言と書いてありますが、あれは、島根創生計画の全体像をイメージするポエムとして書いたんです。昔ながらの普通の生活を表現したものです。そういうものがまだあって今後も伝えていこうと。（上画像）

こういうところだから人間が主役なんです。人が主役、支えるのが地域力なんです。

そうはいっても人間は勉強しないと大した動物ではないんですね。人間のすごいところは勉強することができるところです。学ぶことができる。もう1つは教えることができる。その繰り返しで人の社会が紡がれて、次につながっていく。言葉を覚え、言葉でものを伝えることができるようになったということと、それを使うこと、使いたいと思う本能ですね。

普通に人が集まれば、本当は自分の考えや感想を伝えたり、人の話を聞いて、それに対して意見を言ったりというのは本来難しいことではないはずなんです。だけど、何もしないとそれが十分に機能しない。高まらないと思います。

そこで、やはりシステマチックにそういったことが向上、発展する、関係性が発展していくためのアシストが必要だろうと思うのです。最初にアシストしておけば放っておいても自転しはじめるのです。

人間はうまくいけば達成感がありますよね。嬉しい、満足する。また満足したいからいろいろな行為につながる。そして成果が出て満足する。人間は〝欲たれ〟、欲深い動物なので同じ成果では満足しなくなってくるんですね。そこにもうちょっと、という気持ちが出る。これが向上心です。で、向上心が出るとワンランク上の努力をする。そうするともうワンランク上の成果が出る。達成感が出て満足する。その繰り返し。

大切なのは、最初に導いてやることなのです。なるべく効果が出るような生活、人の動きを最初に導いてあげることで、あとは満足のエネルギーと欲たれと向上心で自転して、人は学びを深めていく。だからその最初を導くことが社会教育だと思っています。

編集部：入り口、スタートですね。

野津：それは大人の責任だろうと思います。大人ももちろん学ぶ。生まれてから幾つになっても100歳になっても学ぶ。ただ、大体50歳を過ぎたら学

「笑顔あふれる　しまね暮らし」宣言

島根には、自然と歴史の中で営んできた、人々の豊かな暮らしがあります。

近所では、子どもたちが元気に走り回り、
若者は恋愛をし、趣味を楽しみ、地域活動にも参加する。
家族を思い、やりがいのある仕事に就き、高齢になっても、元気で生きがいを感じている。
皆で囲む食卓は笑い声に包まれ、穏やかで心地よい時間が流れる。

そんなごく普通の暮らしです。

地域の助け合いや絆が残る古き良き人間関係が、郷土愛と誇りを育み、
人々の多様な関わりを通じて生まれる新しい試みが、未来への希望を高め、
暮らしをより豊かなものにしていきます。

この人間らしい、温もりのある暮らしを、ここで営み続けたい。
未来の子どもたちへ、大切に贈り届けたい。
日本中の多くの人へ、島根にしかない暮らしを知ってもらいたい。

「島根創生」の始まりにあたり、
「笑顔あふれる　しまね暮らし」を守り、育て、未来へつなげていくことを、
ここに宣言します。

イメージ動画は
こちら

びと教えのウエートを半分ぐらいにすべきだと教わったことがあるので。もうちょっと教えるほうにも回らないと（笑）。だから、１００歳になっても20学んで80は教えるとかね。

一生学びの中にあっても教える役割を担うことで、次の社会、地域に文化を伝えていく。ここの部分をしっかりさせる。全体のシステムは社会教育だと思っています。生涯学習と社会教育は表裏と言いますけれども、生涯学習はシステムではないと思っています。

努力と満足感と欲たれと向上心を回るのがシステム。それが自転する。将来的には自転する。学ぶほうの立場からすれば生涯学習であればそれはシステムではなく、人が絡むという、教える、導く、向上心を助けていくというところが社会のシステムなので、それが社会教育だろうと。

それを誰がやるのかということです。システマチックにやらないと十分な効果が得られない。短時間で無駄なく効果を得ようと思ったら、やっぱり分かった人間がちゃんと導く。それを我々島根県は行政がやっています。なぜかというとそれをやると地域がもつからです。経済的な恩恵が少なくても、本能を満たせる部分で人が何となく笑顔で暮らせる、行政がそこを持っていく。

要はそういうことに対価を払う経済力もないし、対価を払ってやってくれるところなんて島根にいないので。行政がマンパワーと税金を使って行います。大きな額は使わないですけれどもね。マンパワーは使う、ということに力を入れています。

編集部：島根は文化的なもの、潜在力はすごくありますよね。

野津：それでめしは食えないので（笑）。雇用が生まれないので。だけど1.5世帯分、うちは女性の有業率が日本で一番高いので、子どもを持っている方が8割ぐらいは働いておられるかな。夫婦そろって正規とは限らないし、子育てとかもあるので時間の都合をつけようとパートとかそういう部分もありますが。そうすると収入的には1.5世帯分。都会の1世帯分よりちょっと低いぐらいの収入はあるわけです。そうやって暮らしながら家庭の中とか地域社会では、ありていに言えば人間らしい生活ができる。何となく何となく元気に。私が使うのは「明るく楽しく元気よく暮らす」、県民の方がそういう暮らし方をするために我々行政はそれぞれの分野で頑張っています。

島根の公民館

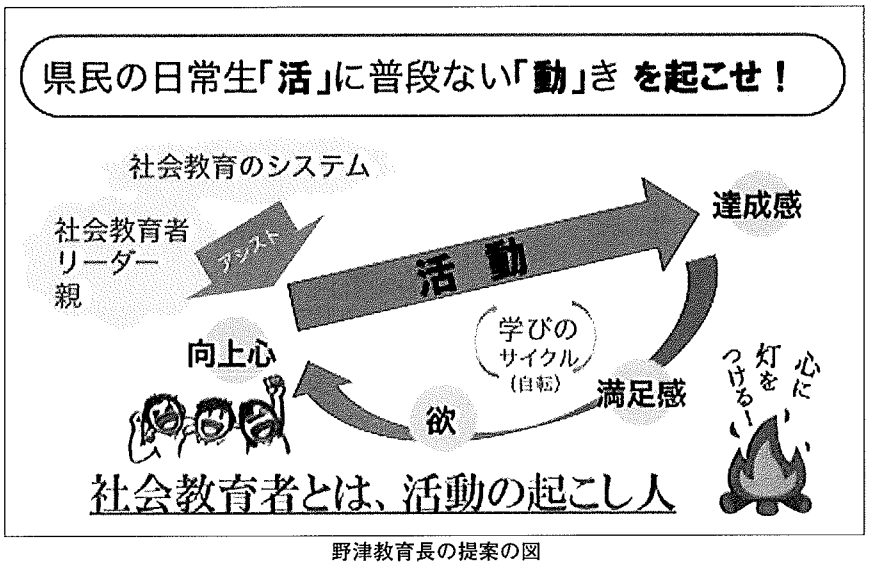
野津：そういうことを端的に目標にしたのが名刺の裏に「笑顔あふれる　しまね暮らし」宣言。1つの形、「ポエム」にしてみました。行政も貧乏なのでそんなに金をかけられないけれども、そうやっていくための手段としてどういうものがあるかというと、その1つは公民館なんです。

行政系の人間でやっていこうとすると、昔は社会教育主事しかいませんでした。そういうところに自然と力が入る。他の県から見るとまだ残ってる、残しているというか、まだ残ってやっているの？　みたいな感じかもしれません。でも我々の社会ではまだまだ必要ですし、そのエネルギーがなくなったら誰も住まない。面白くないもん（笑）。

社会教育が地域に必要なのです。誰も理屈で考えたことはないですが。ただ、片方で行政としては予算とか人事をやらないといけないので意識してやります。なので、公民館がいい、としたときに、公民館って市町村のものですよね。それでは県は手を出さないか

23-01_05-インタ野津12.8 22.12.8 15:25　ページ 9

というと普通は出さないんだけれども、今は一定程度お金を出しながらやっています。公民館は人がいない、世代交代しない、新陳代謝がない、なので若いリーダーを育てるように「地域力醸成事業」をやってテコ入れしたり、ノウハウを横展開したりしています。



野津教育長の提案の図

公民館のいいところは、昔の小学校単位であるので歩いて行ける所にあります。今は子どもがいないから小学校は統廃合が進んでいるけれども、お年寄りはいるので公民館は統廃合がなかなかない。小学校1年生が歩いて行けるぐらいのエリアに大体あります。そうするとコミュニケーションが取りやすいのです。

中山間地域では、子どもはみんなスクールバスになっています。そうでないと通えないので。路線バスなんかないですからね。昼間集落に行っても子どもがいないんです。朝、スクールバスが連れていって、小学校の近くで児童クラブをやって、6時か7時ごろには送って帰ってくる。土日は親が「スポ少（スポーツ少年団）」で町に連れていく。お年寄りが子どもを見たことがないということになります。

世代のエネルギーって人間にはとてもいいものだろうと思うのですが、そこら辺が十分ではない。今、いろんな仕組みで公民館を中心に子どもとお年寄りをつなげることによって、子どもの学びもあるけれどもお年寄りが元気になる。

あるいはもうちょっと学校に近いと通学支援、横断歩道で見守りをしたりします。学校に行って授業の手伝いをしたり。そういうことを少し人が移動して世代間のコミュニケーションを取る。その仕掛けに公民館が大きな役割を果たしています。

編集部：学校運営協議会の活動は。

野津：地域と連携して、地域が学校教育活動を支えるというところはたくさんあります。ほとんどやっています。やっていない小学校なんてないと思います。

県立は学校運営協議会、今年と来年で全校に入りますけれども。それ以前から、県立学校と地元市町村や関係団体とのコンソーシアムもあって、コンソーシアムでもいろいろ意見を聞いて学校運営に反映していくし、学校が地域に協力をお願いする。

ただ一方的にお願いするだけではなくて、子どもが、学校が地域のほうへ貢献する。お年寄りの相手をするのもそうだけれども、お互いさまじゃないと長続きしないのです。そういう意識でやり取りをする。

人材育成について

編集部：社会教育って実に多様で、47

都道府県全部違うでしょうし、島根の中でも例えばこちらの東部、西部、隠岐とか、それぞれが特色のある動きをされていて、そこがすごく注目されている理由でもあるのではないかと感じています。

逆に他の46都道府県から見ると生涯学習センターに当たるものが、東京都はカルチャーセンターや大学の公開講座と重複する事業をやっていて10年持たずになくなっちゃったんです。ところが島根のほうは当初はそういうことをやっていた時期があるかもしれませんけれども、そこから大きな政策転換があって。やはり現場から状況が見えてきて、「学習機会の提供事業」以外の選択して、何をやらなきゃいけないかというところで変わってきたと。

野津：それは県が何でもかんでもできないという財政状況の問題で、人を抱えたりお金を使ったりできないので、そこは市町村で役割分担をする。市町村の場合は公民館があるので、きっちりした組織がある。県はいわゆる学びのほうは基本的には手を引いて人材育成。人を育て、リーダーを育てる。だから研修センターなんですね。名前も変えて役割も変えました。

編集部：教育長は行政ポストがいいのか、いわゆる教員のポストがいいのか、どっちがいいのでしょうか。

野津：うちの県は行政がいいと思いますよ。厳しい県財政の中で予算確保が必要ですから。

編集部：なるほど。

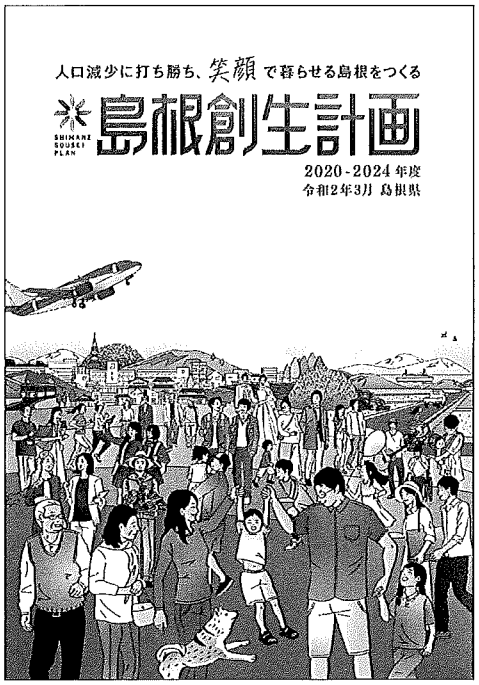
野津：教育は部長級で校長経験者を置いていますから、スタッフは教員のほうが多いし、しっかり教育の中身を担保しています。誰がトップであろうとしっかりしたスタッフが教育系のマネジメントをトップにやっているので、うちの県は事務のほうがいいのかなと思います。

編集部：予算を取りに行くとき、上に掛け合うときにそういう教育福祉ってなかなか予算化されないことが多いわけですけれども、島根の場合は人口減だとか笑顔のためにということで、共通理解があって予算が社会教育課に取れるという理解でいいですか。

野津：力技ですよ（笑）。

編集部：普通にやっていたら取れない。

野津：取れない。まあ僕が「島根創生計画」の策定を担当しているときに、ここへ来るなんて思っていないけれども、かつての社会教育課長としての自分の経験とそこで社会教育主事のみなさんに鍛えられて学んだことが島根の地域づくりに生きるというのは課長の頃から思っているので、例えば自分が直接担当じゃなくても、外れて他のポジションに行っても、そういったところを応援する。いい言葉で言うと応援する。雑に言うと使う。島根の地域振興のために社会教育を使う。そういうことで社会教育を応援する。こんな計画をつくるときに社会教育的な要素をどんどん



島根創生計画の表紙

23-01_05-インタ野津12.8 22.12.8 15:25　ページ 11

入れていくとか、そういうことはするわけです。創生計画は仕事づくり、子育て環境づくり、地域づくり、人づくり。この4本柱なんです。

目次の第1章のところ、これが総合戦略で、これが地方創生部分なんですけれども、活力ある産業をつくると、結婚、出産、子育ての希望を叶えると、地域と島根をつくる。1番目が仕事づくりで、まず仕事があるので人が帰ってくる。ここに住む。住んだら結婚、子育て環境をよくして、希望するだけ子どもをもうけて育てられる。地域づくりを、インフラ整備を含めてしっかりする。この3つが条件づくりで、4つ目が人づくり。人の生き方。環境の整ったところで人がどう生きていくのかということを盛り込んだんです。

そういったことで社会教育を行政計画（島根創生計画）に入れられるようになったのは、社会教育課長のときは入れられないですよ、その後のキャリアで入れていくということをみんながするので。だから「教育魅力化ビジョン」にも入れられましたから。

編集部：確かに島根創生計画の72ページに社会教育の推進という、社会教育という言葉が出てきているんですよね。社会教育士が誕生する前までは「社会教育計画」というのを勉強しなければいけなかったわけで、私も非常勤で15年ぐらいその科目をある大学で教えていたことがあるんですけれども、いろんな県とか市町村の計画を調べたのですが、なかなか社会教育という言葉がクリアに入っているのは少なくて、それでも教える科目は「社会教育計画」なので、その辺が非常に難しいところがありました。

こういうふうにきちんとマスタープランというか、県の軸というか芯。芯が通った計画でないとやるほうも困るんです。ここにちゃんと社会教育と載っていれば現場の職員の人たちもここに出ているじゃないかと示すことができます。さらに予算も付けようという話になるので、ごり押しでも何でも、入るのと入らないのとでは全然違うと思います。その辺はどうですか。

野津：今の知事が就任されたとき、僕は政策企画局長をやっていたので、新しく策定する県の最上位計画には「人づくり」を入れたいと思っていました。

そういう具合にして入ったのは、3期務められた前の知事が引退されて代わるというタイミングで、僕が政策企画局長をやっていて、たまたま社会教育課長の経験があったので、あとは僕がやりたがりなので。前例を踏襲しないので（笑）。ということで入れてもらいました。（次号に続く）

(6) 社会教育の推進

県民一人ひとりが自主的・主体的に生涯を通じた学習に取り組み、その成果を社会生活で生かすことができるような社会をつくります。

【現状と課題】

急速な高齢化、グローバル化など様々な課題の解決に向け、県民の学習ニーズは多様化しており、それに対応した情報提供や学びの機会の充実が求められています。

また、少子化や都市部への人口流出などによる地域の担い手不足が進む中で地域を維持していけるよう、子どもから大人まで幅広い世代が多種多様な学びや体験を通して、人と人とのつながりによるコミュニティの形成を図り、住民の地域づくりへの主体的な参画を促すための環境づくりが求められています。

【取組の方向】

① 社会教育における学びの充実

地域住民が主体的に学習活動に取り組み、その学習成果を地域課題解決やまちづくり等につなげていくため、社会教育士など社会教育関係者の育成を図るとともに学習支援体制や公民館等の機能の充実を図ります。

② 体験活動の充実

子どもが健やかに成長し、社会の中で自立していけるよう、幼児期からの自然体験や集団宿泊体験、多世代交流活動など多様な体験活動を推進します。

③ 図書館サービスの充実

県民一人ひとりのニーズに応じた情報提供の拠点となる図書館の活用が進むよう、教育、文化、産業など多様化する情報ニーズに対応した情報提供や、様々な地域の課題に対応したサービス提供の充実を図ります。

島根創生計画の72ページから抜粋